

【特別寄稿】

# ブエノス・アイレス街歩き

この街をもっと見てみよう！

林 正明

## (3) スール (二)

バラークスは、比較的閑静な住宅地である西部、過去は優雅な高級住宅街で現在は活発な商業地帯・住宅地が混在している東部、その間に挟まれ過去はバリオの繁華街であった中部に分ける事が出来ます。

この中部は東西に狭く南北に細長い地域で、先ず高架鉄道（ロカ線）により西部と隔てられ、千九百八十年代にやはり高架のラプラタ高速道路が完成し東部との隔たりが出来ると同時に人口が急激に減少し、取残された寂れた街となってしまいました。

ブエノス市とラ・プラタ市やテンペレイなどの南西の都市、そしてマル・デル・プラタなど大西洋沿岸を結ぶ鉄道「ロカ線」の開通と同時に、ターミナルを出て最初の停車場「イポリト・イリゴージェン駅」がこの中間地帯に作られました。駅は現在も使用されていますが一日の乗降客数が極めて少なく、構内は閑散としています。

駅前には商店など無く、平屋建ての低い家が立ち並び唯一の二階家は昔タンゴを主題とした映画のロケ地となった廃業したカフェがあるだけで、石畳と古典的な街灯が風情を添える静かな雰囲気となっています。

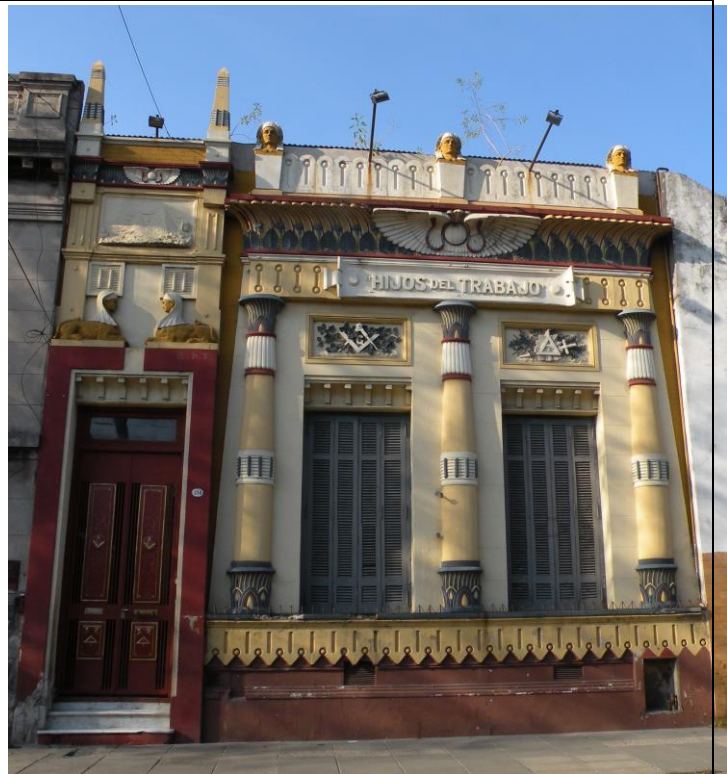


(上) 右手の建物が駅舎。ブエノス市内とは思えぬ閑散とした石畳の道路が有るだけのイリゴージェン駅前広場の昼下がり、これから電車に乗ろうと乗客がたった一人駅へ向って歩いている。

繁華街であった頃の中心地付近に、さして大きくはないのですが全体を黄色系統で塗装され三本の円柱（実際には円柱に見える様立体的に造り付けられて居るものですが）に囲まれた窓、入口の上に飾られているスフィンクス像など、一風変わった建物がありますが、これはロヒア・マソニカ（フリーメイスンと同義）の集会所跡で、壁にコンパス・マークや三角（ピラミッド）の中に「目」が画かれた結社のシンボルも残されています。

中へ入ったことは有りませんが、外見上より判断すると保存状態が比較的良好と思われるロヒア・ラウター口の集会所跡。

窓の上の枠内に「労働の子達 (Hijos del Trabajo)」(上から突き出した照明器具によりライトアップされると思われます) と記され、その下にコンパスと三角（ピラミッド）そして左手のドアの上には向かい合ったスフィンクスのレリーフで飾られ、フリーメイスンの典型的な装飾が施されている建築物です。



バラークスの北部、コンステイトウション駅の近辺に緩やかな起伏のある一寸魅力的な三角形の「スペイン公園」が有りますが、この地域は「病院エリア」とでも言え、「公立保険（健康）センター（元のラウソン病院）」、「ボルダ男子専用精神病院」、「モジャーノ女子専用精神病院」、「精神疾患リハビリ施設」、一寸離れて「イギリス病院」等が立ち並び、住宅が少ないので夜間人口が極端に減少する街です。

#### ボエド（もう一つのスール）

“昔のサンフアンとボエド広がる空、ポンページャ（隣のバリオ名）その向こうは湿地帯・・・”、マンシ(Homero Manzi) 作詞、トロイロ(Anibal Troilo) 作曲のタンゴの名曲「スール」の冒頭に歌われるサンフアン通りもボエド通りも今は大通りとなって交通量が多い賑やかな交差点となっています。この角地にあるのが「オメロ・マンシの角 (Esquina de Homero

Manzi)」となっているカフェで、壁にこの歌詞やマンシのプロフィールなどの銅版が飾られています。



ボエドとサンファンの角にある古いカフェ、今は「オメロ・マンシの角 (Esquina de Homero Manzi)」と改名されタンゴ・バーとなっている。

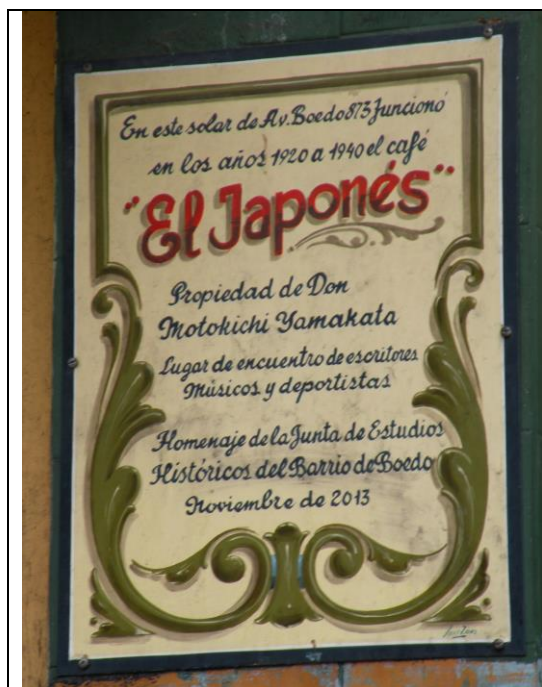
ボエドは元々アルマグロの一部でしたが、千九百七十二年に分離独立した比較的新しいバリオで、中心となる広場 (Plaza) も無い極めて小さな街で、マンシの作品の効果で「スール」の代表の様に思われています。しかし、実際の方位はブエノス市の中心部から見ると「南」ではなく「南西 (sud-oeste)」と言ったほうがより正確でしょう。

バリオの面積は 2.62 Km<sup>2</sup> しかなく、例えばベルグラノーの 6.8 Km<sup>2</sup> やバラカスの 7.6 Km<sup>2</sup> に比べるとその小ささが際立ちます。

昔、千九百二十年～三十年頃この国の文学界も世界の趨勢に呼応し、ブエノス市中心部のフロリダ通りのカフェ「リッチュモンド」にたむろするブルジョア派と、これに対応しボエド通りのカフェに集まるプロレタリア派 (ローマン社会主義) が拮抗していた時代がありました。

この頃、ボエド通りには日本人経営のカフェが、二軒有りました (一説には三軒と言われています)。現在「マンシの角」になっている「エル・ニッポン」と、すぐ近くの「エル・ハポネス」でした。プロレタリア文学派はこの二軒と、やはり近くのパリの有名なカフェ「マルゴット」と同名の店に集まって文学や社会問題等々議論を戦わせていたのでしょう。

因みに、マンシの名作「スール」や同氏のもう一つの専門である映画のシナリオなどの多くは「エル・ニッポン」窓際のテーブルでコーヒーか何かを飲みながら作詞されたと伝えられています。



現在カフェ「ラ・ローカ (La Roka)」となっている「カフェ。エル・ハポネス」があった場所。

左は、この店の外壁に二千十三年「ボエド歴史研究会」が取り付けた記念銅版で、創業者「山形元吉」の名前が記されている。

記載内容によると、店には作家のみならず音楽家やスポーツ選手なども集まっていた模様。

因みに、ブエノス市内に多数(一説では約二十軒)あった日本人経営のカフェは、千九百四十年代に略全て廃業してしまいました。

(はやしまさあき：元アルゼンチン三菱商事、ブエノス・アイレス在住)

注記：

本稿では便宜上以下の西文和訳を採用しています。

Avenida	大通り
Calle	通り
Parque	公園
Plaza	広場